

ネパール写本と私

——『大乘莊嚴經論』テキスト校訂雑感——

舟 橋 尚 哉

一 ネパール写本との出会い

私がネパール写本に興味をもつようになったのは、National Archives, Nepal の目録（ネパール国立図書館所蔵仏典目録四冊―谷大図書館所蔵―）によって、『大乘莊嚴經論』の諸写本を手に入れたときに始まるといつてよい。もっとも、それまでも例えば長尾博士の「カトマンドゥの仏教写本典籍」（岩井博士古稀記念典籍論集所収、昭和38年）や Buddhist Manuscripts of the Bir Library（大正大学研究紀要第四十輯、昭和30年）などによって、ネパール写本に少しは興味をもっていた。

しかしこれらの写本を手に入れることが如何に困難であるかは、長尾博士の論文を読めばすぐわかる。

「短時日の旅行者にとっては、これら三図書館の蔵

書の一部だけでも、精細に調査することは不可能である。然らば写真撮影はどうであったか。將軍カイゼルは極めて寛宏で簡単に之を認めてくれたが、他の二図書館については、国有であるだけに容易ではなかった」（カトマンドゥの仏教写本典籍二四頁）

しかも私が興味のある論書は、Kaiser Collection よりも Hem Raj Collection の方が唯識論書（大乘莊嚴經論や唯識二十論・唯識三十頌など）を多く収集しており、また Bir Library にも大正大学研究紀要「Buddhist Manuscripts of the Bir Library」の目録を参照すると、私の見たい写本が多く保管されているが、長尾博士の御報告によれば、Kaiser Collection（將軍カイゼルのコレクション）以外の図書館では、写真撮影もままなら

ぬとなれば、あきらめるより他はないと思っていた。

ところが高野山大学の氏家覚勝教授（当時、氏家昭夫講師）が二年間のネパール留学を終えて帰国され、National Archives, Nepal の目録四冊（の「コピー」を大谷大学の図書館に寄贈されたこと、更に今まで Bir Library や Hem Raj Collection を初めとして、多くの写本典籍がこの National Archives, Nepal に移管され、幸いなことにこれらの写本を一般にも公開していくことになったという）ことを、この時初めて知った。

早速、氏家覚勝教授に手紙を出して、National Archives, Nepal の目録に載っている私の興味のある唯識論書をどのようにして取り寄せたらよいかを相談したところ、紹介して頂いた方が名古屋大学卒の高岡秀暢氏であった。彼はネパールに留学中、仏典に興味を持ち、その後、仏教典籍の写本が散逸することを危惧して、ネパールの各寺院に保管されている写本をマイクロフィルムに収めていたという。そして私は彼に頼んでいくつかのネパール写本を容易に手に入れることができたわけである。

(一) 大乘莊嚴經論 (Mahāyānasūtrālamkāra)

当時、私は授業で『大乘莊嚴經論』の梵藏漢対照によ

る講読を行なっていたので、龍谷大学所蔵の大谷探検本 A 本、B 本は参照していたが、サンスクリットとチベット訳と合致しないところがところ／＼にあり、その個所に相当する大谷探検本 A 本・B 本を見ると、往々にしてチベット訳と合致していることに気づき、サンスクリットテキスト（レヴィ本）を大谷探検本 A 本・B 本やチベット訳によって訂正すべきであるかどうかを検討中であつた。というのは、大谷探検本 A 本・B 本の間でも一致しないところがあり、また明らかに写し間違いと思われるところもあるため、これらの写本によってレヴィ本を訂正することには、当然限界があつた。そこでそれに先行する写本、またはレヴィ本の原本などがネパールにあれば、それによって『大乘莊嚴經論』のテキスト校訂が出来るのではないかと考えていた。

National Archives, Nepal の目録の三冊は Bhratsūcipatram I, II, III となつており、第四冊目が Sucipatram (Baudhadarsana viśaya) となつていたので、この目録の第四冊目に従って最初に取り寄せた写本が No. 202（私はこれを N_A 本と略称）と目録に載っていない写本（私はこれを N_x 本と略称）だつたと思う。その後、目録の第二冊目 Bhratsūcipatram II に従って取り寄せた写本

が

No. 4. 291 (N_s 本と略称)

No. ca. 20 (N_o 本と略称)

であり、目録の第四冊目の No. 201 (N_B 本と略称) もそれと相前後して取り寄せたと思う。

これらの写本の転写の順序については、すでに私が「ネパール写本 大乘莊嚴經論の研究」(国書刊行会昭和60年、対照による 三〇頁―三九頁)に「第一章第三節ネパール諸写本の同異とその転写について」というタイトルのもとに論じているので、ここでは省略するが、今考えると N_A 本は N_B 本からの転写であるから N_o 本と名づけ、N_o 本は N_s 本より転写された重要な写本であるから N_A 本と名づけた方がよかったかとも思う。しかし私が最初に手に入れた写本を N_A 本と名づけ、小論文にも当時すでに発表していたのだから、今更略称を変更するつもりはな

(1) 唯識三十頌 [釈] (Trisika-karika)

[Trisikāvijñapti-bhāṣyam]

『唯識三十頌』は『唯識二十論』と²⁾、世親 (Vasubandhu) の唯識思想の大系を解明する上に重要な論書である。一般に定本として S. Lévi: *Vijñaptimatratā-*

siddhi (1925) が用いられているが、最近インドで出版された Chatterjee 本 (1980年) や Mahesh Tiwary 本 (1967年) もある。

S. Lévi のテキストは、『大乘莊嚴經論』のレヴィ本ほどの誤まりはないが、それでも誤植などの問題があり、宇井博士の「梵文正誤訂正表」(「安慧・護法、唯識三十頌釈論」所収、昭和27年)や荻原博士「梵文改訂表」(「安慧造三十唯識の釈論和訳」荻原雲来文集所収、昭和2年)などによって一応読めるようになったとはいえ、まだ完全ではない。近年、Gokhale 博士によって訂正が加えられたが、レヴィ本の p. 24-p. 29 までであり、全体からいえばほんの一部分に過ぎない。

そこで『唯識三十頌』のネパール写本によって、レヴィ本を訂正または修正できないかと考え、National Archives, Nepal の目録により、比較的古い写本を中心に手に入れることにした。

これら『唯識三十頌』の写本については、すでに「ネパール写本対照による『唯識三十頌』の原典考、並びに『唯識二十論』第一偈第二偈の原本について——Lévi 本の原本を求めて——」(仏教学セミナー第43号)一六頁以下で詳しく論じたので、ここでは要点だけを述べることに

するが、『唯識三十頌』の写本は『唯識二十論』や『三性論偈』とともに *karika* (偈頌) のみを集めた貝葉の、比較的古い写本が一本存する。〔Pa. 3 本と略称〕

この他に安慧の『唯識三十頌釈』の写本が存する〔Pa. 1 本と略称〕。貝葉で十四葉のものはレヴィ本の底本となつた写本であるが、レヴィ本と比較対照すると 1b~6b と 20a~27b に相当し、途中の 7a~19b が欠落していることに気づく。

National Archives, Nepal にはもう一本貝葉のものがあり〔Pa. 2 本と略称〕、十三葉で文章の途中から始まり途中で終わっている。ところがレヴィ本と比較対照してみると、先程の Pa. 1 本の欠けている部分 (7a~19b) と合致することがわかる。

この他にも『唯識三十頌』のネパール写本は若干存するが、すでに先の論文で論じているので、ここでは省略する。

(三) 唯識二十論 (*Vimśatika-vijñapti-bhāṣyam*)

『唯識二十論』は偈頌並びに釈がすべて世親 (*Vasubandhu*) の作であるだけに重要な論書である。しかしレヴィ本では第一偈第二偈に相当する最初の部分が欠けてい

て還元梵語で補われている。^④しかし『唯識三十頌』の項で述べたように、Pa. 3 本とどう『三性論偈』『唯識二十論』『唯識三十頌』の偈頌だけを集めた梵本が存する。

『唯識二十論』のネパール写本としては Bir Library の目録には No. 297 *Vimśatikā-kārikā* や No. 298 *Vimśatikā-vijñapti-bhāṣya*, No. 299 *Vimśatikā-vijñapti-mātratā-siddhi* などがある。National Archives, Nepal の目録では *Bhatsūcīpatram III* p. 54 No. Pra. 1697 *Vimśikābhāṣyam [vijñaptimātratāsiddhi]* のこと、*Sūcīpatram (Bauddhadarsanavisaṣya)* p. 83, No. 260 *Vimśikā karikābhāṣyam* のものと位しか見あたらない。その中、No. 1697 は貝葉で六葉しか現存しないが〔Pa. 4 本と略称〕、初めの一葉が欠けているので、全七葉の写本であったと思われる。レヴィが底本とした写本は、おそらくこの写本であると思われる。レヴィは 1b が欠けていたので、これに相当する箇所をすべて還元梵語で補ったのである。(第一偈第二偈の梵本は別に偈頌だけを集めた写本が見つかったので、レヴィは仏訳を出版するときに発表している。)^⑤

National Archives, Nepal にはこの他にも貴重なネパール写本が多く存するが、今は私の興味のある唯識論

書を中心に紹介したまでであって、今後、これらのネパール写本が多角的に活用されることを念ずるとともに、また新しい未発見の写本が見つかったりする可能性も十分あると思う。補註

二 ネパール写本によるテキスト校訂雑感

『大乘莊嚴經論』の授業(講読)をやっているレヴィ本に数多くの訂正すべき点が見つかったので、一度これらをまとめて発表したいとかねて考えていた。初めは私の気づいた点のみを取り上げ、「仏教学セミナー」や「印度学仏教学研究」に「大乘莊嚴經論の原典考(または原典の考察)」という形式で発表していたが、「校訂テキスト」の方がどこをどのように訂正したのか一目瞭然であるので、できれば「校訂テキスト」を発表したいと思っていた。

ただ「校訂テキスト」は印刷屋泣かせの組版であるので、はたして出版社が引受けてくれるかどうか心配であった。そこで「仏教学セミナー」(第38号)に校訂テキストの一部を発表して、これを著書出版の参考にできればと考えた。実際、先に「仏教学セミナー」(第38号)で校訂テキストの一部を発表した後、諸先生方から御助言

を頂いたお陰で、いくつかの不適切な切り方や誤まりを訂正することができた。ここに御助言を頂いた諸先生方に厚く御礼申し上げたい。

例えば mahāyāna, śrāvakayāna であるが、先には uttama-yāna, agra-yāna などとの関連で、 maha-yāna, śrāvaka-yāna としていたが、特に mahā-yāna はおかしいという意見が多く、著書では mahāyāna, śrāvaka-yāna とした。

先には [ity-adi]kōpadesam としたのを、 Abhidharmaśāstra-rmasamuccaya-bhāṣyam との関連で、 [ity-adi] kōpadesam とし、註⑥をつけた。

先には artha-vibhāvanān kurute としたが、写本をよく見ると kurute ではなく prakurute となっていたので、レヴィ本の kurute を訂正して prakurute とし、註⑥をつけた。

先には antarāyikas としていたが、 etat が中性であるので、 antarāyikam であると読めないとこのことで、写本では antarāyikas のように見えるが、文法を重視して antarāyikam とし、註⑥をつけた。

先には写本を重視して anāgata-bhayavat としたが、意味の上から著書では anāgata-bhaṅgavat を採用し、

註⑩をつけた。

この他、先に「仏教学セミナー」(第38号)に校訂テキストの一部を発表したお蔭で、著書出版の折、修正や訂正ができ、間違いを少なくすることができたと思う。

実際、テキスト校訂という仕事は細心の注意が必要であり、しかも写本間で異なっている場合、どちらを採用するかを決めなくてはならない。勿論、校正ミスは許されない。なぜなら、校正ミスはテキスト校訂では致命的となる場合が多いからである。(今までに『大乘莊嚴經論』の校訂テキストは第一章、第二章、第三章、第九章、第十章、原典考は第十一章、第十二章、第十三章、第十四章、第十五章の各章について発表した、全体から見れば半分位であろう。)

校訂テキストを作るには偈頌の韻律も重要である。例えば第一章第四偈の場合、この偈が *arya* 調であることはレヴィもテキストの註(4)に指摘しているが、レヴィ本のままでは、

āghrāyamaṇākātukam svādurasam
⁴⁻¹⁵ — — | — U — | — U — | — U — | — U — |
⁴⁻²⁸ yathausadhām tadvat |
 U — U — | — | — | — |

dharmadvayavyavasthā vyanjanato

⁴⁻²⁷ — — | — U — | — | — U — | — U — |
 rtho na ca jñeyāḥ || 4 ||
 — | — U — | — | — |

となっていて、偈頌(a—b)の部分が2マートラ不足している。ところがネパール写本による私の訂正によれば、

āghrāyamaṇākātukam svādurasam
⁴⁻³⁰ — — | — U — | — U — | — U — | — U — |
⁴⁻¹⁵ yadvad ausadhām tadvat |
 — | — U — | — | — | — |

dharmo dvayavyavastho vyanjanato

⁴⁻²⁷ — — | — U — | — | — U — | — U — |
⁴⁻¹⁵ rthena ca jñeyāḥ || 4 ||
 — | — U — | — | — | — |

となり、*arya* 調の偈として韻律も合致している。

また第九章第八十偈の場合には、レヴィ本に、
 paśyatām gurutvam dirgham nimittam
 — U — | — | — | — | — | — |

vīryam ātmanah |
 — | — U — | — | — | — |
 māninaṃ bodhisatvaṇaṃ dure bodhir

— U — — — U — — — U — — — U — — —

nirūpyate ≒ 80 ≐

U — U —

とあるが、第二韻脚は *śloka* 第一形式 *paṭhya* の場合、
— U — — U — — — U — — — — — — — — — — — — — — — — —
律が合わない。そこで私はネパール写本によって次の如
く訂正した。

paśyatām gurukam dirgham nimittam

— U — U — U — — — — — — — — — — — — — — — — —

viryam āmanah |

— U — U — U — — — — — — — — — — — — — — — — —

mānīnām bodhisatvānām dure bodhir

— U — — — U — — — — — — — — — — — — — — — — —

nirūpyate ≒ 80 ≐

U — U —

これなら *śloka* の形式と韻律は合致している。

このように偈頌の場合、韻律が合っているかどうかを
確かめる必要があるが、それによって訂正すべき点も、し
ばしば見出されるのである。

最後に私のネパール諸写本の転写順序の決定について、
エピソードを交えながら語りたい。『大乘莊嚴經論』の

ネパール諸写本の転写の順序に関して、私自身こんな
はっきり決定できるとは思っていなかったのである。

しかし今や Z_a^a 本から Z_b^b 本や Z_c^c 本や Z_d^d 本が転写され
たことは自明のことであり、また Z_b^b 本から Z_a^a 本が転
写されたことも明らかであると思う。これらの証明につ
いては、拙著「ネパール写本 対照による 大乘莊嚴經論の研究」の第一
章第三節「ネパール諸写本の同異とその転写について」
で詳しく論じたのでここでは省略するが、これらのこと
がわかってきた背景には、各写本間の相異を書留めてい
ってオリジナルな写本を決定して行ったわけであるが、
この方法に気づいた背後には、意外にも私の梵語文法の
授業と関連があるのである。

今から十年程前、私が初めて梵語文法の授業を担当し
た折、張り切っていたのかデーヴァナーガリーの文字を
教えるとその後で、別のデーヴァナーガリーのテキスト
をコピーして配り、五月の連休の間に二、三頁をローマ
ナイズして提出するよう宿題を出したことがあった。大
部分の学生はわからない箇所は空白にしながらも真面目
にローマナイズして提出したが、中には他人がローマナ
イズしたノートをまる写しする学生もいた。確実に他人
のものを写したと思われる数名の学生を授業の後、教室

に残ってもらい、A君からB、Cへ、B君からD・Eへと写したであろうという、何故先生はそれがわかったのかと不審そうに言うので、他人のものを写したものは写し間違いが必ずあり、ローマナイズされた二つのノートを較べれば、写し間違いがあったり、余分な文字が加わった方が後から転写されたものだと答えた。

実はこの方法がそのままネパール写本の転写の順序を決める鍵となったのである。このような方法はあるいは史料を扱う専門家から見れば邪道かもしれないが、たまたま原典を正確に読もうと思ひ、ネパール写本を比較対照しているうちに気づいたものである。そしてこの方法によってネパール写本の転写の順序が決定できるのではないかと思ひ、著書でもそのように論じたわけである。

今後『大乘莊嚴經論』全体の校訂テキストを出版することが私の夢であるが、印刷屋泣かせの組版を引受けてくれる出版社があるかどうかと思ひながら、テキスト校訂の仕事を進めている今日この頃である。

註

① 「荻原雲柔文集」六二八頁参照。

② Gokhale: Fragments of Shriramati's Trīṃśikāvijñāpīṭhāśya in the Patna collection of Tibetan manuscript materials, 1968.

③ 拙稿「ネパール写本『唯識三十頌』の原典考、並びに『唯識二十論』第一偈第二偈の原本について」(Lévi本の原本を求めて) (仏教学セミナー第43号)

④ Lévi本では還元梵語で補われているが、S. Léviは仏訳を出版するときに、第一偈第二偈(偈頌のみ)の梵本を發表している。

⑤ S. Lévi: Matériaux pour L'Étude du Système Vijnāpīṭhāśya, Paris 1932, p. 175 参照。

(昭和六十二年九月二日脱稿)

補註

昨年の十一月二十八日のチベット学会における松田和信氏の研究発表によれば、ダライラマ十三世寄贈のレニングラード写本の中から『瑜伽師地論』の撰決撰分の梵文断簡が十二葉見つかり、照合の結果、巻53と巻54に相当することが確認された。(大正三〇、五八九b一六〇〇cに相当) また『華嚴經』の普賢菩薩行品の梵文断簡も一葉見つかったという。(昭和六十三年一月記す)